

特集 認知症を知る

現在、65歳以上の6人に1人が認知症であると推計されており、平成37年には5人に1人が認知症になると言われています。

市民一人一人が認知症を正しく理解することで、本人、家族、地域の皆さんが安心して暮らせる五所川原市となるよう、様々な視点から「認知症」について紹介します。

認知症の方の声 — 五所川原市在住 Nさん 76歳 女性

「本当に、本当に、早く受診してよかった」

「はじめは息子が気づいてくれたんです。お母さん最近変だから病院行きなってる。でも、そんなことないって病院には行かなかったの」

市内に住むNさんは、ご主人と息子さんとの3人暮らし。昨年6月にアルツハイマー型認知症と診断されました。病院受診を勧めてくれたのは地区の民生委員Oさんでした。

「最初、Oさんに認知症の検査を勧められたとき、正直言って嫌な思いでした。まさか自分が認知症ではと言われるなんて…」

Nさんが「認知症」に抵抗を感じるのには理由がありました。古くからの友人が数年前に認知症になったのだそうです。

時折、人格が変わってしまったかのように急に怒り出す友人の姿を見て、

「正直、こうはなりたくないなって思っていました。だから、検査を勧められたことが本当にショックでした」

と当時の心境を語るNさん。

Oさんに勧められ、嫌々ながらも検査を受けに行き、結果、認知症と診断されました。そして、認知症のお薬が出ることになりました。

「認知症のお薬って病気の進行がゆっくりになるお薬なの。今となってはただけど、Oさんにはすごく感謝している。あの時、検査を勧められなかったら、今の生活はどうなっていたら。本当に、本当に、早く受診してよかった」

早期受診の必要性について、身をもって経験されたNさん。息子さんも、服薬開始となってからは、以前とは違うねと安心してくれているそうです。



* 写真はイメージです

「ひとつ不満があるとすれば、恥ずかしい話だけど、夫について。この病気のことを持ち出して、皮肉なことを言われることがある。腹も立つけど、申し訳ない気持ちもあるの」

現在は、介護サービスを利用することなく生活を続けているNさん。在宅介護支援センターの相談員が定期的に訪問し、見守り支援を行っています。

この日、相談員から予防目的でのデイサービスを提案され、Nさんも利用に前向きな様子。

少しでも長く自宅での生活を続けられるようにしたいと話していました。

特集 認知症を知る

家族の声 — 五所川原市在住 Mさん 83歳 男性

「いつも物が見つからない妻…」

市内に住むMさんは、3歳年上の妻Tさんと2人暮らし。3年前前、妻のものの忘れが多くなっていることに気づいたそうです。

「最初は、たすにしまった着替えが見つからないとか、その程度のものでした。でも、だんだんと頻度が増えてきて、おかしいなと思い、病院へ行かないかと誘ってみました。でも、行きたくない...。それほど苦にはなっていなかったの、そのままになってしまいました」

その後、だんだんもの忘れが進んでいったTさん。平成29年に入ると「〇〇が見つからない」から「〇〇を盗られた」と話すようになったといいます。

「大変でした。自分がよそに女を作って、その女に服や貴金属を買いでいるのだろうと怒るんです。探すと、見つかるんだけど、その妄想は消えません。自分の話すことと違うことは、聞こえない、見えない、わからないのです」

後日、地域包括支援センターの職員が高齢者の生活状況のアンケートを取りに訪問。その結果を、東京から帰省中の長男もいるときに一緒に聞きました。

「もの忘れが始まっているかもしれないから、病院へ行ったほうがいいと言われて。最初は受診を拒否していたけれど、長男もいることで渋々病院へ行きました。結果、認知症と診断されて、お薬ができました」

それから、お薬を調整しながらの定期受診が始まりましたが、たびたび受診拒否や服薬拒否が見られていました。

担当ケアマネジャーも決まり、地域包括支援センターの職員や近所のお友達も一緒になって病院に行くよう説得しましたが、頑として聞く耳を持ちません。

その後、だんだんと怒りを抑えることが困難となり、遂に入院となりました。



* 写真はイメージです

「できる限りこの家で…」

「入院中も毎日電話がかかってきました。自分を捨ててしまってこんなところに連れてきて...。と話したりもしました。でも、お薬の調整が進むと、穏やかになり、いつもの妻に戻っていきました」

退院後は、自宅へ戻り、訪問看護とデイサービスを利用しながら2人の生活を続けているMさん夫婦。

「今は、また怒りっぽくなってしまったらどうしようという不安が一番です。日中は包括やケアマネジャーに相談できるけど、夜はそうはいかないので。それでも、今の穏やかな状態であれば、できる限りこの家で2人の生活を続けていきたい」

地域・行政・医療・介護の力を合わせて、以前の生活を取り戻しつつあるMさん夫婦。

夏祭りに合わせて帰省する長男と一緒に、3人で新しい市役所を見に来るんだと嬉しそうに話していました。